

目次

序

オモイカネの『逃避行』

5

一

今日からの『提督』は私です

10

二

それゆけ！『チームナデシコ』

21

三

それは『出逢うはずのない妹』

34

四

揺れる『アキツシヒメの心』

55

終

あの『忘れえぬ世界』

79

後書き

85

本作は、機動戦艦ナデシコ並びに艦隊これくしょん一艦これ一を独自解釈した二次創作小説です。キャラクターの描写には若干作者の主観や解釈が交わってますので、ご了承ください。

序

オモイカネの『逃避行』

「お前は知ってるか!? ゲキ・ガンガーが、二八話からゲキ・ガンガーVになったことを!」

連合軍によるオモイカネの書き換え。それを阻止すべく、オモイカネの中核部分へと進入した私とテンカワさん。

自意識の枝を刈り取ろうとしたら、オモイカネの自衛反応が生み出したのはゲキ・ガンガー3。

「そして! 幻の変形パターン、ドラゴン・ガンガーを知ってるか!!」

そのゲキ・ガンガーを倒すべくテンカワさんがイメージしたドラゴン・ガンガーに、オモイカネのゲキ・ガンガーは怯みます。

「ドラゴン! ブラアアアスト!!」

ドラゴン・ガンガーの放った一撃によって、オモイカネのゲキ・ガンガーは消滅。これ以後はオモイカネの自意識の枝を刈り取って、連合軍の書き換えプログラム

ラムを破壊すれば、一件落着。

……なはずだったんだけど……。

「わっ!? なんだ、なんだ!」

テンカワさんが枝を切り取ろうとした瞬間、艦内に響き渡るアラーム。おかしい。自衛反応が消えれば、後は障害が無くなるはず。

「ルリちゃん、一体何が起きてるの!」

「今調べてます……」

艦長に促され、私は必死に原因を探る。

「えっ? これは……」

アラームが鳴り響いた直後から、相転移エンジンが暴走し始めている。まさか、これは……

「あらら。どうやらオモイカネの自爆プログラムが発動しちゃったみたいだねえ」

アラームを聞いたアカツキさんは、やつぱりこうなっちゃったかと言わんばかりにあっつけらかんとした態度を取ります。

「自爆プログラム? 何それ!」

それを聞いたエリナさんは、初耳とばかりに声を荒

げます。

「オモイカネにはね、船体が無事でもブリッジが占拠されてクルーは全滅。……何て非常事態になった時を想定して、敵にナデシコを渡さない最終手段として自爆するよう、予めプログラミングされているのさ」

人間で例えるなら、あなたに無理矢理犯されるくらいなら死んだ方がマシとか、そういう状況ってわけですね。

まっ、それはともかくとして、どうやらオモイカネはその自爆プログラミングを本来とは異なる意図で発動させたっていうのが、今回の件みたい。

「自爆プログラムって……。あなた、それを知ってて連合軍には話さなかったわけ!?」

予め教えていれば、このような事態にはならなかったはず。どうして黙ってたのよと、エリナさんは憤ります。

「第一地球を守るために戦うのは人間だ。機械じゃない。その通り。だけど、火星に行くのは、人間じゃできない”んだよねえ……”」

ナデシコの本来目的は、火星の奪還。地球を守るために戦っているのは、あくまで連合軍へのお膳立てに過ぎない。こっちがへりくだって接待してるのをいいことに、調子付いて無理難題吹っかけられたら、意地悪の一つでもしたくなるよねと、アカツキさんは緊急事態だというのに半笑いします。

「火星でオモイカネが積んだ経験は、ネルガルにとっても失いたくない貴重な財産だ。第一、我が社の所有物を好き勝手いじられるのは好みじゃないんでね」
一介のパイロットの癖に、なんでこの人、上から目線で偉そうな態度なんだって？ ネタ晴らしすると、アカツキさんはネルガルの会長さんです。まっ、グラサンかけて「これが若さ」って言う人くらいバレーバレーですけど。

「言いたいことは分かるけど、このままナデシコが自爆しちゃうのは不本意でしょ!？」

「なあに、何も問題ないさ。何もね……」

何てたってナデシコのクルーは、性格に難ありだけど、各分野のエキスパート揃い。この程度の困難さを

切り抜けられない無能な人材を採用したつもりはないよと、会長らしく社員を褒め称えるアカツキさん。

「大変！ 艦長命令です！ 今すぐ総員退艦してください！！」

そう。ナデシコのクルーはバカばかりだけど、バカじゃないのが取り柄。艦長はこれから何をすべきか即座に理解し、大声で叫びながら部屋を後にしようとしています。

「おい、ユリカ!? まさかこの期に及んで逃げろって言うのか!？」

緊急事態なのは分かるけど、オモイカネをこのままにして逃げるのはゴメンだぞと、テンカワさんは憤ります。

「えっ? アキトは逃げる必要ないよ?」

「ちよっ! 今総員退艦って……」

「だってそうでも言わないと、あのお邪魔虫さんたちは逃げてくれないもん」

ピンチをチャンスに変える。艦長はこの緊急事態を連合軍の人たちを強制的に追っ払う絶好の機会と捉え

たみたい。こういう時にポジティブな思考できるのは、今の私にとってはちよっと羨ましい。

「アキトとウリバタケさんは、ルリちゃんと一緒にオモイカネの暴走を食い止めて! それじゃ!!」

私は艦長としての務めを果たしますと、艦長は駆け足でブリッジへと戻って行きます。

「艦長、総員退艦ってどういうことですか!？」

ブリッジに戻るや否や、通信士のメグミさんがあたふたとしながら訊ねます。

「えーと、説明すると長くなるんだけど。色々あって、ナデシコは相転移エンジンの暴走による自爆モードに移行しちゃいましたー」

だから一刻も早く総員退艦命令を流してくださいと、艦長はメグミさんを促します。

「ひいふうみいよ……。あれっ、ルリルリやアキトくんがいないわよ?」

総員退艦後、点呼を取っていた操舵士のハルカさんが私たちの不在を指摘します。

「はい。だってアキトたちにはナデシコに残ってもら

つてますから」

「残ってるって、どういうことですか、艦長!？」

何でアキトさんを残したんですかと、メグミさんは激しく問い詰めます。

「ナデシコを、私たちの船をここで失うわけにはいきません。ダイジョウブイ! きつとアキトとルリちゃん、ついでにウリバタケさんがなんとかしてくるから!!」

満面の笑みでブイサインをしながら、私たちに全面的な信頼を寄せる艦長。ここまで頼ってくれるのなら、全力で期待に応えなきゃならない。オモイカネ、絶対にあなたを死なせたりしないから……!」



「クソッ、ダメだ! 全然止まる気配がねえ!!」

相転移エンジンの制御プログラムに必死にアクセスするウリバタケさんだけど、やっぱり無駄みたい。

「オモイカネ! ダメッ! 記憶を消されたくないの

は分かる。でも、ここで自爆したら、今までの思い出が全部……!!」

ナデシコと共に消えてしまう。オモイカネ自ら記憶を消してしまうのだけは、絶対に止めなきゃ。

でも、オモイカネは私の言うことを聞いてくれなくて。一体どうすれば……?」

「諦めるな。ルリちゃん!」

そんな時でした。テンカワさんが背中から励ましながら、私に手を合わせてくれます。

「アキトさん……」

「ルリちゃん。さっきはありがとう。ルリちゃんに励まされたお蔭で俺、今まで以上にゲキ・ガンガート向き合えた。だから!」

今度は俺がルリちゃんの背中を押す番だって、アキトさんは私を必死で支えてくれる。

「えっ!?」

その瞬間、私とテンカワさんの身体は紋様が浮き出て光り輝きます。その光は収まるどころか一方的に広まり、そして……。

「ん？　ここは……」



「ただだけ意識を失っていたかは分かりません。気が付いた時、私はテンカワさんと手を重ね合わせながら、見知らぬ砂浜に倒れていました。」

「さっきの光は何だったんだ……って、ここはどこなんだー!?」

「なんだよもう、うるさいなー」

覚醒したウリバタケさんが騒ぎ立てます。そのあまりの喧騒さにテンカワさんも目を開けます。本当にどこなんでしょうここは？

「私に記憶されているデータを照合する限りでは、ここは日本の横須賀です。ただ、どうやら別世界の日本のようです」

さっきの光で、平行世界にボソソジャンプしたってこと？……って、今の声は？

「横須賀かー。って、きつ、君は一体誰なんだー!?」

テンカワさんが驚きながら指差します。するとそこには、私を少し大きくしたくらいのも身長で撫子柄の着物を纏い、胸にはグラビティブラスト、背には相転移エンジンの艤装を装備した少女の姿がありました。

「あなたは、誰？」

凛とした日本人形のような流れる黒長髪の少女に、私は思わず質問してしまいます。初めて聞く声。でも、不思議と親しみのある声色。まさかとは思うけど、あなたは……。

「はい。私はナデシコ級一番艦「ナデシコ」です——」

「はい？」

状況がいまいち掴めず、テンカワさんはキョトンとします。無理もありません。気付いたら戦艦が美少女になってた。なんて普通、簡単には受け入れられません。「ふーん。成程なあ。確かにナデシコを擬人化したつて言えば通じる容姿だな」

順応早いですね、ウリバタケさん。

「いやしかし。見事な大和撫子っていうか、どこことなくルリルリに似てるなー」

私に似ていますか？ うーん。確かに私を十六歳くらいに成長させて黒髪に染めたような雰囲気に見えるくはないですけど……。

「それは恐らく私が、ルリルリと親しくしているからでしょう」

「親しく？ あなたはナデシコ？ それとも、」

オモイカネ？

「両方です。姿形はナデシコ。でも意識はオモイカネのまま」

つまりはメインコンピュータであるオモイカネとナデシコそのものが文字通り同一化した、という解釈でいいんでしょうか？

「はい。呼び方はいつも通りオモイカネで構いません」
ナデシコという呼び方は、戦艦として私を表したい時だけで、普段はオモイカネのままが良いと。

「うーん。何が何だかさっぱり分からない。一体どうして別世界の横須賀に飛ばされて、ナデシコが人間になっちゃったわけ？」

「説明します。前者は恐らく、相転移エンジンの暴走による副作用」

相転移エンジンは、真空の空間をエネルギー準位の高い状態から、低い状態へ相転移させることでエネルギーを取り出すシステム。それが私とテンカワさんと呼応することで、別次元に相転移した、というのがオモイカネの見解。

「別次元に相転移って、そんなことが……」

状況を受け入れられないテンカワさん。でもそれが、一番しつくりくる説明なのも確か。見たところ周囲にいるのは、艦内に残っていた三人だけ。ナデシコと一緒に飛ばされたという、十分な状況証拠になります。

「私はあの時願いました。どこか遠くへ。記憶の消去が行われないような世界に行きたいと」

それが、相転移エンジン暴走の理由。オモイカネは自爆しなかったわけじゃない。ただただ、身勝手な連合軍の魔手から逃れたかっただけ。そう聞いて、ちょっとだけ安心。

「ごめんね、オモイカネ。あなたはそこまでして、記憶を失いたくなかったのね」

それでも、オモイカネが必死の抵抗を試みたことには変わりない。いつも側にいたはずなのに、本心を汲み取ってあげられなくて、本当にごめんなさい。

「いえ。いいんです。こうして少女の姿になって直接ルリルリと話せたことで、大分心が癒されました」

意思の疎通ができたことに、オモイカネは微笑する。お蔭で私の罪悪感も大分洗われたんだけど、オモイカ

ネにルリルリ、ルリルリって慕われるのはちょっとびり恥ずかしい。

「ルリルリ。私がこの世界に飛ばされ、そして少女の姿となったのには、何かしらの理由があると思います」

それを確かめるにはまず、この世界の住人とコンタクトを取る必要があると。

「確かにここで突っ立ってても埒が開かねえな。ここが横須賀ってなら、黙って街を指せば自ずと出会えるもんだよ」

そうと決まればまずは善は急げだと、先んじて一歩を踏み出すウリバタケさん。だから、順応早いですって。 「おっ、何か見えて来たな」

しばらく歩くと、特徴的な赤煉瓦の建物が見えて来ました。

「データ照合。当該建造物は、二十世紀前半の、横須賀鎮守府”に酷似しています”

「横須賀鎮守府って言うと、大日本帝國海軍の軍事施設か。随分とまた昔の世界に飛ばされたもんだな」

「それってどれくらい前なんです？」

「クルスクでナナフシとやりあったる？ あん時戦った戦車が現役だった時と同時代だ」

オモイカネ程ではないにせよ、持ち前の知識でウリバタケさんはテンカワさんに解説します。

「そう、ここは軍の施設……」

連合軍から逃れたというのに、辿り着いた先は軍のお膝元。お釈迦様の掌でグルグル回る孫悟空のように軍の呪縛からは逃れられないのねと、オモイカネは溜息を吐きます。

「他を思い当たる？」

何もわざわざ嫌な思いをさせられた軍に頼る必要はないと、私はオモイカネに声をかけます。

「いいえ。釈然とはしませんが、ここが最適です」

戦艦が少女になったのだから、この世界における軍が何かしらの関与をしている可能性は大いにあると。

「帝國海軍は、連合軍とは別組織。それならば、まだ抵抗がありません」

と、オモイカネは自ら鎮守府に足を踏み入れます。「あら？ ひよっとして新たな艦娘の着任かしら？」

「でもおかしいね。あんな艦装、見たことない」

「つてことは、未知の深海棲艦が攻めて来たの？」

「でも、人を連れてくるのです。だからきつと、仲間なのです」

すると、小学生くらいの少女四人が、私たちに四人に駆け寄って来ます。

「なっ、なんでこんな小さな女の子が!？」

軍の施設にいるんだと、驚きを隠せないテンカワさん。いえ、それを言ったら私の立つ瀬がないんですが。

「小さい女の子ですつて!? 失礼ね！ 晝は、一人前のレディなんだから!!」

見た目通りの反応をされたのがよっぽど癪に障ったのか、やたらと聞き覚えのある名前の女の子はブンスカと怒ります。

「アカツキ？ つてことは、アカツキの遠い遠いおばあちゃんのものか?」

まあ、そういう反応になりますね。

「おっ、おっ、おばあちゃん!? レディはレディでも、そこまで年食ってないわよ!!」

あまりに両極端な反応に、暁さんの怒りは収まりそうにありません。

「暁？　つてことはひよつとして嬢ちゃん、駆逐艦暁が人間になったってことか？」

そんな中、ウリバタケさんがミリヲタの知識全開で訊ねます。

「あら？　そっちの失礼な青年と違って、よく初対面で分かったわね」

これも普段の一人前のレディとしての振る舞いが良い噂として広まった証よねと、ケロッと上機嫌になる暁さん。おばあちゃんは言い過ぎにせよ、小さい女の子という指摘は間違っていないようです。

「やっぱりな。となるとそっちの水色髪の嬢ちゃんは響で、いかにも双子ちゃんなのは、雷と電か」

「ハラショー。ご明察」

「へー。やるじゃない、おじさん！」

「はわわ!?　どうして分かったのですか？」

どうやらビンゴみたいで、三人の少女たちはそれぞれ別の反応をします。

「なあに。似通った体型してりゃあ、姉妹艦だったのは一目瞭然よ。で、雷と電はよく間違えられてたつて話だから、双子ちゃんが雷と電。消去法で残りの嬢ちゃんは響ってわけよ」

得意気に見分け方を語るウリバタケさん。メジャーな戦艦や空母ではなく、ネームシップ以外はあまり語られることのない駆逐艦の名前をピタリと言い当てられるのは見事としか言いようがありません。

「消去法で当てられたのは少し残念だけど、それだけ知っているということは、少なくとも普通の人間ではないね」

見たところ、艦娘なのは一人だけ。他は恐らく艦娘の関係者だろうと、響さんは推察します。

「艦娘って？」

「眺みたいに、嘗ての第二次世界大戦期の艦艇がレディになった存在の呼び名よ！」

これを機会に覚えておくのねと、暁はテンカワさんをピシッと指差しながら強調します。

「成程。推察の域を出ませんが、この世界は私たちが

いた世界の艦艇の記憶を呼び寄せ、少女として具現化しているのでしょうか」

原理は不明ですが、その召喚システムとナデシコの相転移エンジンの暴走が呼応し、私たちはこの世界にボソソジャンプしたのでしょうと、オモイカネは自らの持論を展開します。

「うーん。難しくてよく分からないけど、その艦装を見る限り、雷たちがいた時代より、もーっと未来から来たって感じよね」

「お名前は何て言うのですか？」

「はい。私はナデシコ級一番艦ナデシコと申します」

電さんの質問に、オモイカネはいかにも大和撫子な淑女という仕草で自己紹介します。

「ナデシコ？ 名前的には松型駆逐艦って感じよね」

でも、ナデシコなんて名前の駆逐艦は聞いたことないし、珍しい名前よねーと、暁さんはナデシコをまじまじと眺めます。

「いえ、私は“機動戦艦”です」

「戦艦ですってー!? 驚いたわねー。聞いた話だと戦

艦は戦後、廃れたってことだったけど」

一度歴史の幕から降ろされた艦種が復活するのも興味深いわねと、雷さんははしゃぎます。

「いづれにせよ、ここで立ち話もなんだし、提督の所に連れてった方が良さそうだね」

「なのです！ ナデシコとお連れの方、電たちに付いて来るのです」

こうして私たちは、彼女たちを統括する立場にある提督の元に案内されることとなりましたとさ。



「提督。新たに着任した艦娘を連れて来たわよ」

私たちは横須賀鎮守府の中を案内され、提督のいる執務室に通されました。

「おっ！ ご苦労だったな」

「えっ!? ウソだらっ!?」

「おっ、お前まさか!?」

「ヤマダさん?」

暁さんの声に反応する提督の顔と声に、私たちは驚きを隠せませんでした。

「ガツ、ガイ！ お前、こんなところで生きて……」

そう……。目の前にいる提督は、亡くなったはずのヤマダ・ジロウさんこと魂の名はダイゴウジ・ガイさんと瓜二つの人だったんです。

「夢じゃないよな！ お前、ガイだよな……!!」

テンカワさんは目に嬉し涙を浮かべながら提督さんに近寄ります。

「なっ、なんでえ？ 俺の名を知ってたんだ!？」

初対面の男が自分を見るや否や涙を流して名前を語れば、誰だっけよつとします。

「やっぱりか！ やっぱりガイなのか……。良かった、生きてて本当に良かった……」

「いつ、生きてるって、何言ってるんだお前？ 俺は死んだことなんかねえぞ!？」

「えっ？ でもさっき、ガイって……」

「確かに俺の名は大豪寺凱だが……俺はお前なんか知らねえぞ?」

「えっ……?」

どこのつまり、同姓同名の赤の他人ってこと。まっ、世の中にはカッパやきそば現象な人間は結構いるって話ですから、異世界にそっくりさんがいても不思議ではありません。

「そっかあ。ガイだけじゃないんだな……」

生き別れの親友との再会のはずがぬか喜びに終わり、テンカワさんはシュンとします。

「何だかガツカリさせちゃまったみてえで申し訳ねえが、アンタ等の名前を聞かせちゃくれねえか?」

「はい。私はナデシコ級一番艦ナデシコです」

「そのナデシコでオペレーターやってるホシノ・ルリです」

「えっと俺は、コック兼パイロットのテンカワ・アキトです」

「俺はメカニックのウリバタケ・セイヤだ。覚えておけよ!」

提督さんに促され、私たちは次々と自己紹介します。「あんがとよ。しっかし、名前を聞く限りナデシコ以

外はクルーか。クルーが艦娘と一緒に召喚されたってケースは聞いたことねえんだが、興味深い事例ではあるわな」

もちろん、今まで第二次世界大戦期以外の艦娘が召喚されたことはねえ。ひょっとしてこの世界は少しずつ変化してるのかもしれないねえなど、凱提督は語ります。

「世界と言えば、艦娘たちは何と戦っているんです？」

元は艦艇だった存在が、わざわざ少女の姿になって呼び出される。まさかハーレムを作るためじゃないし、彼女たちがこの世界に呼ばれているのは何かしらの理由があるはずだと、私は訊ねます。

「ああ、そうさ。俺等は謎の勢力、深海棲艦と戦っている。そいつには人間の兵器は通じねえ。唯一対抗できるのが、艦娘なんだよ!!」

謎の敵対勢力に、唯一の対抗できる存在。どっかで聞いた設定です。

「それってまるで、木星蜥蜴と戦ってる俺等みたいじゃん!」

まあ、そういう反応になりますね。あつ、このツツ

コミ、本日二度目です。

「も一ついいですか？ ヤマダさ……じゃなかった。

凱提督は見たところ二十代前半のようですが、そんな若くて提督になれるんですか？」

提督というのは、艦隊を指揮する立場にある。それなりに戦闘経験を積んだ者にしかかなれないはずです。

「ああ。何故なら艦娘たちは、艦艇だった時の記憶を全て引き継いでいる」

「全て、ですか」

記憶を引き継いでいるという台詞に、オモイカネは反応します。

「良いも、悪いも全て。やはり本来意志を持たない船でも、記憶というのは大切なものなのですわ……」

ならば自我を持っている私にとって記憶は、より一層失いたくないもので当然だと、オモイカネは感慨深い声で語ります。

「つまりだ。元の世界で旗艦を務めていた艦娘たちなんかは、当然乗船していた歴戦の提督たちの指揮経験がフィードバックされているってわけだ」

どこのつまり、艦娘たちで行動しても指揮系統にはまったく問題ない。提督は作戦指揮を取るよりも、艦娘たちをまとめ、その心の支えとなる存在だと、凱提督は語ります。つまり、この世界における『提督』は、私たちのいる世界の『艦長』と同義って訳ですね。

「こんなもんでいいか。ついでに俺もアンタたちについて知りたいんだが」

さっきの木星蠍蛸って単語が気になるけど、凱提督は質問を返します。

「はい。それについては私が説明します」

自分の記憶を消そうとした連合軍の人たちに対抗するかのように、オモイカネはやや力が入った声で語ります。

「へえ。確かに似たようなところがあるな」

「はい。でも、私たちとは決定的に違う点があります」

それは、私たちがオモイカネという自我を持ったコンピュータ制御の戦艦で戦っているのに対して、艦娘たちは人の頭脳と技量で戦っている点。

「人間の目で探して、狙って当てる。オモイカネのア

シストがなければ戦えない私たちには決してできない戦法。それ自体は称賛に値します。でもそれで、*“負けた”* んですよね」

第二次世界大戦で日本は惨敗した。物量差、軍首脳の無能さ、陸海軍の足の引つ張り合い。敗戦の原因は一言では語れない。その中の一つに、技術の差はというのはいさぐさある。

「その差を埋め切れないばかりか、人力に頼り切るあまり、最期は爆弾抱えて人を突っ込ませるしかできなくなつた」

艦娘という人の技量を頼りに戦っている、いざれは同じ道を辿りますよと、私は忠告します。

「ちよつとルリちゃん、言い過ぎ……」

場の空気が悪くなるのではと、テンカワさんはあたふたとします。

「いやあー！ いいトコ突いてくるね、嬢ちゃん！」

だけど、凱提督は一杯取られたって感じに称賛してくれます。

「嬢ちゃんの言う通りだ。どんなに頑張つたって、ハ

イテク技術に人力だけじゃ対抗し切れねえ。そして、艦娘たちは、*「それが」*できねえ！」

艦艇だった時の記憶を受け継いでいるということは、裏を返せばその時苦手だったことは今でも苦手だったこと。深海棲艦たちがハイテク兵器を使い始めたら、辛うじて勝利を収めている戦況は一気に不利になっていくだろうと。

「そこでだ！ ルリちゃんって言ったな？ アンタに提督になってもらいてえっ！」

「はい？」
今の話の流れから、どうしてそういう結論になるんですか？

「話を聞く限り、ルリちゃんはエキスパートのオペレーターと見た。その知識と技術を用いて、艦娘たちにハイテク戦のイロハを叩き込んで欲しいんだ」

「欠点だって分かっているのなら、あなた自身がやればいいんじゃないですか？」

「いやー。俺は頭でああだこうだ考えんのは苦手でよー。分かっていても実行できねえんだよ。だーっはっ

は！」

やっぱり見た見た目通りの脳筋な熱血漢なんですな。

「私が、提督ですか……」

提督と聞いて、色々と思いきこすことがある。ナデシコには今まで、二人の提督が着任した。

一人目の提督は、フクベ・ジン提督。負い目を持っていて、ナデシコを私たちに託して、火星で果てた。

二人目の提督は、正直好きじゃない。ナデシコが連合軍に捕捉された時、真っ先に裏切ったのが彼、ムネタケ・サダアキだ。拘束された後逃亡したにも関わらず、何食わぬ顔してナデシコに戻って、後任の提督を務めている。

オモイカネの暴走の原因を作った張本人の一人の癖に、そのことを反省しないばかりか今回も率先してオモイカネを書き換えることに賛同する。もしもフクベ提督が健在だったら今回の事故は起きなかつたと思うと、悔やんでも悔やみ切れない。

何はともあれ、私が提督になるということは、彼等と肩を並べる立場になるということ。本音を言ううと、

あまり乗る気にはなれない。

「……。分かりました。私で良ければ謹んでお引き受けします」

「ただど私は、首を縦に振った。この世界における提督が、私たちの世界の艦長と同義なら、悩む必要はない。いつも明るくマイペースで、天真爛漫なお調子者。だけど決める時はしっかりと決め、艦長としての責務はちゃんと果たす。」

「今回も私に全面的な信頼を寄せてくれた、いつも側で見続けているあの人の真似をすればいいだけだ。」

「オモイカネは言った。私がこの世界に飛ばされ少女の姿となったのには、何かしらの理由があると。それは私自身にも言えること。私がこの世界に飛ばされた理由が、提督になることではないかって。」

「ありがてえ！ そうと決まっちゃあ、早速着替えた！」

「はい？」

「えっと。だから今の展開で、どうしてそんな話になるんですか？」

「提督となるからには、決まった制服を着なければなら

ねえ！ 郷に入れば郷に従って奴だよ、ルリちゃん！」

「ああ。ナナフシ戦の時の、あのノリですね。こうなるともう拒否権がないのは経験上明らかなので、大人しく従った方が良さそうです。」



「そうして無事着替え終わったのはいいのですが……。」

「おっ！ これでルリちゃんも、立派な提督だ!!」

「……」

「ルリちゃん、なかなか似合ってるよ！」

「……」

「カワイイぞー、ルリルリ！」

「……。あの、みんな褒めてくれるのは嬉しいのですが……もつと小さなサイズの制服はなかったのでしょうか？」

「プカプカの制帽に、袖が余りまくりな純白の制服。」

ズボンまで履くと動きにくそうなので、上着だけしか

着替えませんでした。

「いやあ。流石に子供サイズの制服はなくてよお。駆逐艦の子の制服着せりゃあいいって話だが、それだとしまらねえしな。当面それで我慢してくれよ」

分かってるのならわざわざ着せなくてもいいと思うのですが、言っても無駄ですね。

はあ。最初がこれでは前途多難そう。ここでも、バカばつかな仲間たちに囲まれることになりそうです。



それゆけ！ 『チームナデシコ』

そんなこんなで提督となった私ですが、艦隊を指揮するには当然仲間が必要です。凱提督曰く、一艦隊は最大六人。メンバーは鎮守府内にいる艦娘から好きに選んで良いとのことでした。

かくして私は、王様から魔王を倒すため、なげなしのゴールドと安価な武器を与えられ、酒場で仲間を集う勇者のように、艦娘GOをやることとなったのです。

「仲間集め、か……」

そう聞いて、ふとこの間のことを思い出す。火星奪還を目的とした、スキヤパレリ・プロジェクト。その一環として集められたナデシコクルー。

あの日私は、いつものように研究に付き合わされていた。愛情の欠片もない養父母に実験材料のモルモットとして扱われる日々。あの日訪れたプロスペクターさんとゴートさんは、私を監獄の檻から釈放してくれた。

その行き先がわくわく動物園だったのには呆れたけど、いつの間にか馴染んで居心地の良い場所になっていた。

「ルリルリ、今笑いましたね？」

「えっ？」

オモイカネに指摘されてハツとする。どうやら私は、無自覚のうちに笑っていたみたい。まっ、スカウトされた人間がいつの間にかやらスカウトする側になったのですから、それを滑稽だと思ったということにしておきましょう。

「オモイカネ、あなたはどんな人と一緒に戦いたい？」

ここにいる間、密に付き合う間柄になる人たちだ。私の独断と偏見ではなくて、オモイカネの意見も聞いてみたい。

「そうですね。私の存在意義を認めてくれる人。そういう人と共に戦えたらと思います。でも、まずは」

「まずは？」

「晝さん、私と共に戦ってくださいませんか？」

「えっ？」

オモイカネに開口一番誘われ、キョトンとする暁さん。
「どっ、どうして暁なのよ？」

「鎮守府を訪れて一番最初に声をかけてくれたのが、あなたですから」

だからファーストコンタクトを取った相手として暁さんを迎え入れたいと。

まあ、そうなりますね。仏の顔も三度までなので、このツツコミはこれで打ち止めにしておきます。

「そっ、それだけのっ!？」

武勳艦であるとか一人前のレディであるとかもつともらしい理由ではないことに、暁さんは不満なようです。

「いいえ。それだけではありません。暁さんは、四人姉妹の長女ですから」

こう見えて私も四人姉妹の長女なんですよと答えるオモイカネ。

ナデシコ級は全部で四隻。長女のナデシコを筆頭に、次女のコスモス、三女のカキツバタ、そして末妹のシ

ヤクヤクです。

ナデシコ級は通常の姉妹艦とは違い、形状も用途も異なるのだけれど、それぞれが自意識を持ったコンピュータを搭載しているので、姉妹の絆は確かなものでしょう。

「私はまだ妹たちと共に戦ったことはありません。ですから、普段から妹たちをまとめている姉の秘訣を学びたいのです」

「そういうことなら、喜んで仲間になってあげるわ!」
一人前のレディの長女というのがどういったものかどこん教えてあげるわと、暁さんはやたらと上機嫌です。

これであと四人。仮に残りの暁型三人を加えても良いところですが、それでもまだ一人足りません。さて、どうしたものやら。

「あーっ! いたいた!」

「ほう、君が……!」

そんな時でした。私たちに声をかける二人の艦娘が近付いて来ました。

「ねえねえあなた、戦艦なんでしょー？ いいな、いいな。清霜と身長あんまり変わらないのに戦艦なんてー」

ナデシコをまじまじと眺めながら羨ましがらる子。台詞を聞く限り、清霜という名前のようにです。

「清霜さんということは、駆逐艦ですね」

データベースを検索して、名前を返すオモイカネ。艦娘の体躯は、概ね艦艇だった時の大きさが反映されていると聞きました。駆逐艦は小学生から中学生、重巡や戦艦ともなると大人のお姉さんという感じです。

ナデシコの全長は二九八メートル。だけどその半分からはフィールドブレードとエンジン部分で占められていて、従来の戦艦と比べれば大分スマート。だから身長も中学生サイズくらいになっています。

「こそ、夕雲型最終艦、清霜よ。将来戦艦になるのが夢なんだけど、なかなかならしてくれなくてー」

だから未来の技術を以てすれば念願の戦艦になれると思ひ、仲間に加わりたいそうです。いくら未来の技術でも艦種そのものを変える大改装は不可能だと思う

のですが。

「なれるといいですね」

ど、ニツコリと笑うオモイカネ。夢を壊さないように何となく誤魔化す辺り、早くも姉の包容力の發揮ですね。

「それであなたは？」

オモイカネは、もう一人の巫女装束の女性に声をかけます。身長的には戦艦や空母ですね。

「私は航空戦艦日向だ。航空戦艦といっても、別に空を飛ぶわけじゃないぞ？」

えっ、飛べないんですか？ 私たちの世界では戦艦は空を飛ぶのが当たり前になっていきますので、いかにも飛行可能な名前なのに飛べないというのは意外です。「私は君が『機動戦艦』というのが気になってな。良ければどんな船なのか教えて頂きたいのだが？」

「了解しました。ご説明致しますよう」

日向さんの質問に応じ、説明を開始するオモイカネ。ナデシコは空や宇宙を航行可能で、エステパリスという人型機動兵器を搭載していること。そういった機能

を搭載していることから機動戦艦という艦種なのだ
と説明します。

「そうか。未来にはまさかの航空戦艦の時代が訪れて
いたのだな……」

戦艦の砲撃力と艦載機の発艦能力を備えた航空戦艦
は、言わば機動戦艦の原型みたいなものだ。先駆者として
これほど名誉のことはないよと、日向さんは微笑
します。

なんでしようこの人？ 一見真面目な人のように見
えて、実はズレている人のような印象を受けます。普
段は寒いギャグを連発するけど、戦闘では至って真剣
なマキさんを彷彿とさせます。

「可能ならば、私に機動戦艦の何たるかを教えていた
だきたいのだが？」

ようは機動戦艦になりたいってことですね？ 発想
の根幹が清霜さんと同じですが、日向さんの場合戦艦
なので不可能ではないのがポイントです。

「了解しました。今後ともよろしくお願ひ致します。
清霜さん、日向さん」

仲間の条件は、自分の存在儀を認めてくれる人。二
人はその条件に合致するので、無事に仲間に加わりま
した。これであと二人ですね。

◇ ◇ ◇

「あっちにもこっちにも、いい女ばかり……。ウへへ
へ、改造してえなー」

一方その頃、ウリバタケさんは鎮守府内を歩き回り、
艦娘たちを物色しています。いかにも変態親父の台詞
ですが、曲がりなりにもメカニックなので、やはり最
新鋭の艦装を施したいと血が騒ぐのでしょうか。

「しかしだ！ やはり伊の一番に改造するのはあの娘
だ！ どこだ？ どこにいる!？」

ここが横須賀鎮守府なら配属されているはずだ。あ
の戦艦の中の戦艦とも言える艦娘がと、ウリバタケさ
んは血眼になって探します。

「いつ、いたっ！ あの一見かんざし風に刺している
測距儀と二号一型電探は間違いない!!」

お目当ての艦娘を見つけ、ウリバタケさんは駆け足で近寄ります。

「ねえ、ねえ君、大和だろ、大和？」

駆け寄るや否や、ウリバタケさんは鼻息を荒くしながら名前を連呼します。

「はっ、はいっ？ 確かに大和ですが……」

どちらさまですかと、怪訝な顔を向ける大和さん。

そりゃ、見知らぬオッサンが鼻の下伸ばして近付いて来れば、不審に思っただけです。

「やっぱり大和かー。早速だけど、おじさんに付き合っしてくれない？」

「えっ!? つ、付き合うって……」

「決して君に損はさせないからさー。ちよつとだけ、ちよつとだけでいいから……」

耳元でデレデレとした顔で囁きかけるウリバタケさん。完全に女子高生に援助交際を求めの変質者です。

「こらー、その人！ うちの艦娘に何しようとしてるんですか!？」

そんな時、ウリバタケさんを制止するように、真っ

白な鉢巻きを巻いて手にはスパナを持った少女が大声で叫んで来ます。

「んんー？ その身なりからすると、あんたメカニックかか？」

「工作艦明石です。そういうあなたこそ話にあつた整備工のようですけど、うちの艦娘を勝手に改造されたら迷惑です!」

「ほお。アンタが明石なら、話は早い！ 実はだな、ゴニョゴニョ……」

ウリバタケさんはターゲットを変え、明石さんの耳元で囁きます。

「ほおー、へえ……。それは面白そうですね!」

「だろっ！ そうと決まりや、早速実行だ!!」

「ですね！ 大和さーん!!」

メカニック同士気が合うのか、いつの間にか意気投合して、明石さんは大和さんに声をかけます。

「はい。何でしょうか?」

「早速ですがあなたを、『宇宙戦艦』に改造します!!」

「えっ!? はっ、はいっ!？」

突然物騒な単語を突き付けられて、大和さんは狼狽します。

「やっぱ『ヤマト』と言ったら『宇宙戦艦』だろ!!」

大和を宇宙戦艦化するのはお約束、男の浪漫だと、ウリバタケさんは少年のようにはしゃぎます。

「女だけど共感します! というわけで大和さん、早速工廠に行きましょう!!」

「えっ!? ちょっと待ってください! ちょっと!!」

こうして大和さんはウリバタケさんと明石さんの二人に腕を引っ張られ、捕獲された地球外知的生命体のように、工廠へと連行されるのでした。

四人目の仲間も加わり、残りはおと一人……というのはあまりに大和さんが可哀想なので、ノーカウントです。ウリバタケさん、気持ちは分からないでもないですが、相手の承諾も得ずに改造しようとするのは厳禁ですよ?



「……頼もー!」

その頃、テンカワさんは鎮守府内にある甘味処「間宮」の門を叩いておりました。

「男の方に手伝っていただけるのはありがたいのですが、テンカワさんはパイロットなのでしょう?」

どうしてここで働きたいのですかと、店主の給糧艦間宮さんは訊ねてきます。

「えっと俺、パイロットはパイロットなんですけど、エステバリス操縦できるのはこれのお蔭で……」

やや緊張した声色で、テンカワさんは右手の甲を見せます。

「これは体内に流れているナノマシンが身体に浮き出たもので、IFSってシステム使えば自由自在に操縦できるんですけど……」

逆に言えば、IFSがなくては素人も同然。IFS搭載兵器のないこの世界では、パイロットとしての活躍はできないと。

「で俺、元々はコック志望でして、この世界で何にもやらないってのも申し訳ないので、コックに専念しよ

うかと」

そう思いここで働かせてもらえないだろうか、テンカワさんは改めて頼み込みます。

「自分でできることを精一杯行おうとする姿勢は素晴らしいと思います。では一つ、テストを行いますよ」

「テスト？」

「はい。これから私が指名した艦娘に、テンカワさんのお料理を召し上がっていただきます」

その方の舌を唸らせることができたなら合格ですと、間宮さんは採用試験の概要を伝えます。

「分かりました！ 絶対に納得のいく料理を作ってみせます！」

絶品を作ってコックとしてやっていくぞと、テンカワさんはやる気十分です。

「ではその方をお呼びしましょう…….と思いましたが、あちらから来たみたいですね」

「こんにちは、間宮さん」

暖簾をくぐって来たのは、弓道着を来た清楚で落ち着いた着きのある艦娘でした。

「赤城さん、ちょうどいいところに来てくれました。実は……」

間宮さんは訪れた赤城さんに、試験の概要を伝えます。

「そういうことですか。了解です。一航戦の誇りにかけて、お相手致しますよ！」

赤城さんは了解して、テンカワさんの目の前の椅子に腰掛けます。

「初めまして。俺はテンカワ・アキトって言います」

「私は正規空母赤城です。以後お見知りおきを」

「リクエストがあるなら何でも作りますんで、気軽に言ってください」

間宮さんから課題は出されていない。それならば赤城さんの好みを聞くのが一番だと、テンカワさんは訊ねます。

「そうですね…….何か変わった物を作っていただけないでしょうか？」

「ヘッ？ 変わった物って？」

ですが、赤城さんの口から出た言葉は、テンカワさ

んの期待とは異なるものでした。

「他のお店ではなかなか味わえない、珍しい料理です。もちろん、ただ珍しいだけでは駄目です。きちんと食べられるものではなくてはなりません」

いつぞや艦長やメグミさんがテンカワさんに作った料理ではダメだということですね。まあアレは、珍しい料理っていうよりは、単なるゲテモノですが。

「りよっ、了解っす！」

シャキッと起立しながら、ぎこちない動作で厨房へと向かうテンカワさん。

（珍しい料理、珍しい料理……）

あまりに漠然とした課題に、テンカワさんは頭を悩ませます。何せ珍しいと言われても基準が曖昧なんですから、無理ありません。

（珍しい料理って言えば、キャビアとかフォアグラ？でも、そんな珍味、材料としてないだろうし、そもそも作ったことないし）

最低限、お店にある素材を活かさなくてはならない。限られた食材で既存のメニューにない料理を作るとい

う思わぬ試練に、テンカワさんは悩み続けます。

（この店にある材料で、メニューにない料理。それでいて俺に作れるもの……あつ、そっか！）

テンカワさんは閃きました。珍しいという言葉に惑わされ過ぎて、本質を見失っていた。何もそんなに悩む必要はなかった。間宮にはない、ナデシコの定番メニューを作ればいいんだと。

「お待たせしました！これが俺自慢の、珍しい料理“です！”

数十分後、テンカワさんはお腹を空かしている赤城さんの前に料理を差し出しました。

「これは……。一見何の変哲もないハヤシライス。でも、この料理の真ん中に乗っているのは……」

涎を垂らしながら、赤城さんは興味深い視線を向けます。

「タコさんウィンナーですね。珍しいと言えば珍しいですが、何という料理なんです？」

「えっとこれは、火星丼と言って、ナデシコの食堂の名物メニューっす」

「火星丼ですか。では、早速いただきます！」

両手を合わせていただきますの仕草をした後、赤城さんは割り箸をパキッと割って食し始めます。

「こっ、これは!? ジューシーなウインナーの食感に絶妙に絡み合うスパイス……! ハヤシライスにタコさんウインナー。ありふれた料理を合わせて、ここまです新鮮な味を引き出せるだなんて……!!」

赤城さんは目を見開きながら、女性とは思えない豪快な食いつぶりで、あつという間に火星丼を平らげてください。

「ふう。ごちそうさまでした」

「どっ、どうでしたか、俺の料理?」

食べつぶりを見る限り言うまでもないと思いますが、テンカワさんはドキドキしながら結果を待ちます。

「大変珍しく、美味でした。合格です!」

「やつ、やつたー!」

満面の笑みを浮かべる赤城さんに、テンカワさんは嬉しさのあまりガッツポーズします。

「そう言えばホシノ提督は共に戦う仲間を募っている

という話でしたが……もしも私が仲間に加わったら、毎日この火星丼を“タダで”ご馳走していただけますか?」

「えっ!? おっ、俺の料理で良ければ喜んで!」

ご馳走してあげますと、テンカワさんは上機嫌で承諾してしまいます。

「ありがとうございます。それでは早速、おかわりです!」

「へっ?」

「聞こえませんでしたか? “火星丼のおかわり”です!」

ニコニコと空の丼ぶりをテンカワさんに差し出す赤城さん。その笑顔の裏にはさつさと飯を出せというプレッシャーが隠れ潜んでいました。

「はっ、はいっ! 分かりました!」

言われるがままに、テンカワさんは次の火星丼を作ります。

「ふう。ご馳走様でした。何杯でも食べられますね、これ」

「あつ、ありがとうございます！」

戸惑いながらも、何とか笑顔を繕うテンカワさん。

「それでは、もう一杯！」

「はっ、はいっ!?」

「火星井のおかわりです！」

「でっ、でももう二杯も!?」

それだけ食べれば十分腹も膨れただろうと言いたげなテンカワさん。

「何を勘違いしているんです? まだ私のお腹は満たされていませんよ?」

「ご馳走するということは私を満腹にさせるのと同義ですと、赤城さんは迫り続けます。

「言い忘れてましたけど、赤城さんは常人の数倍は食しますね」

これは赤城さんに限らず大型艦全般に言えることですが、赤城さんは特に顕著ですと、間宮さんは後出しジャンケンで説明します。

「えっ! ええー!?」

「それと、赤城さんにタダでご馳走するという話でし

たが、食材費はテンカワさんのお給金から引かせていただきますね」

さらっと追撃をかける間宮さん。相手の提示した条件をよく聞かず安請け合いするものではないですね。

ご愁傷様。

でも、私たちのいないところでなりゆきとはいえ仲間を募ってくれたのは、ちょっと嬉しい。ありがとう、アキトさん……。



『そーいう訳で、赤城さんが加わることになったんだよ』

赤城さんの腹を十分満たした後、テンカワさんは疲れ切った顔で報告して来ます。艦娘になったとはいえナデシコの通信システムは健在なので、クルー間ではいつものようにウインドウ越しで会話可能です。

「これで後は一人ね、ルリルリ」

「そうね」

あと一人か。それにしても、今まで集まったメンバーは、背伸びしがちな長女駆逐艦に、戦艦に憧れる未っ子駆逐艦。真面目そうに見えて微妙にズレている航空戦艦。そして大飯食らいな正規空母。

何と言うか、ナデシコに負けず劣らずの個性的なメンバー。一言で表すなら、バカばっ……

「あーもうっ！ バカばっかり!!」

えっ？ 今、物凄く聞き慣れた台詞が飛び交ったような……。

「工廠内ではしゃぐなって何度も注意してるのに、一向に直す気配ないんだから！」

声の聞こえた方向かうと、そこでは一人の駆逐艦が騒いでいる駆逐艦の子を叱責していました。

「ホント、バカばっかで困ったものね……」

「……」

「ん？ 何よアンタ？ 私の顔になんか付いてるのも？」

「……。別に……」

バカばっか連呼する駆逐艦に睨み付けられたので、

思わず視線を逸らしてしまいます。何でしょう、普段口癖にしている台詞をいざ他人が使っているのを見ると、えらく不快な感情を抱いてしまうのは。

「ルリルリはあなたに興味を示したんですよ」

と、火に油を注ぐように、オモイカネが間に入ります。

「はあっ？ 霞に興味を示したって、何で？ 意味分かんないわよ!？」

まさか他の駆逐艦の子を注意してたのが気にいらないからとか言わないでしょうねと、霞さんは攻撃的な姿勢で突っかかって来ます。

「その格好、見たところあなたが最近鎮守府に着任した提督ね。言っとくけど、私は子供に付き従う気はないわよ」

「言い返しますけど、私も他人をバカバカ叱責しているお子様を仲間に加えるつもりはありません」

売り言葉に買い言葉。自分で言っておいて激しい不快感に駆られます。同族嫌悪って奴ですね。

「はあっ？ 出来の悪い子をバカと言わないで、何て言うのよ!？」

他の言い方があるなら言ってみなさいよと、霞さんは激昂します。

(そういうこと……)

どうやら同じバカばっかでも、私とはニュアンスが違うみたいです。私が毒気付いてバカばっかというのに対して、霞さんは仲間を叱責する意味合いが強いです。

「……。良かったら、仲間になってくれませんか？」

これも何かの縁かもしれないと一転し、私は頭を下げて仲間に誘います。

「誰が！ そんなダボダボの制服着ただらしな性格好の提督の元で働くだなんて、死んでもゴメンだわ!!」

「……!」

別に好きで着ているわけでもないのに、制服を理由に拒絶されるのはちょっと不愉快です。

「霞さん、そのくらいにしてもえませんか？ これ以上ルリルリを侮辱するのは、私が許しません!」

そんな時でした。私の気持ちを代弁するかのようにな、オモイカネが怒りの感情を露わにします。

「その怒り方だと、よっぽどのようね。いいわ、仲間になってあげる!」

一見大人しそうな子が感情的になるのは、それだけ相手を慕っているということだ。なら、仲間になって実力の程を確かめさせてもらうわと、霞さんは仲間になることを承諾してくれます。

(一件落着ですね)

紆余曲折ありましたが、これで無事五人の仲間を揃えることができました。バカばっかな個性的メンバーばかりで骨が折れそうですが、何とか頑張っていきたいと思います。



「待たせたな！ ようやくルリちゃん専用の、特注制服が届いたぜ!」

数日後。凱提督から発注していた制服が届いたと連絡を受け、執務室を訪れて試着したのですが……。

「……あの、これ。サイズが今までのと変わらないの

ですが？」

「よく見な！ ボタンが撫子柄だ!!」

特注って、そこですか？」

「いやいや。何せ鎮守府に勤務する男性職員からは、えらくその格好が可愛いと好評でな」

適正サイズの制服発注するわけにもいかなかったと。はあ。こんなダボダボの格好が可愛いと？ ホント、バカばっか……。

「そういや、艦隊名はどーする？」

凱提督曰く、好きな艦隊名を名付けて良いということでした。

「それなら、『チームナデシコ』をお願いします」

何だかんだで、ナデシコクルーは私にとって大切な存在。だから艦娘たちとも、ナデシコのみなど同じくらい仲良くなりたいたいという思いから付けてみました。こうして艦隊名も決まり、ようやく私は提督としての一步を踏み出したのでした。



……私たちがこの世界へと訪れた時より数日前。アメリカ西海岸付近では、ある重要な事件が起きていました……。

「相転移完了。これで障害物は全て滅した」

「ナンテヤツ!? カンムスドモガイッシユンデ……」

米軍の艦娘数十人が瞬く間に消滅したことに、戦艦棲姫は啞然とします。

「わらわの実力、とくと見たか？ そなたたちには否応無く協力してもらおうぞ。我が姉君の技量を計らんがための……!」

……どうして考えも及ばなかったのでしょうか？ この世界に召喚されたのが、私たち以外にも存在する可能性を……。